

待降節第1主日（B年）

第一朗読 イザヤ 63・16b-17、19b、64・2b-7

第二朗読 一コリント 1・3-9

福音朗読 マルコ 13・33-37

2020. 11. 29

高円寺教会 9：30 ミサ

ビジュ・キシヤケール神父（吉祥寺教会主任司祭）

皆さま、今日から全世界の教会は待降節を迎えます。待降節は来たるべき救い主、キリストの誕生を待ち望み、キリストを迎えるためにわたしたちの日々の生活を見直し、祈りと節制によって、心を整える期間です。わたしたちは、クリスマスの準備として、飾り付けをしたり、クリスマスツリーを飾ったり、お友達にメッセージを書いたりしますが、わたしたちの生活を良い業で飾り、祈りという手紙を神様に送るよう努めましょう。

「待降節」とはラテン語で「**Adventus** アドヴェントゥス」と言いますが、それは「到来」という言葉を意味します。キリストが 2000 年前に世に来られ、やがて、栄光のうちに来られることとしての「到来」とそこに向かう人間の姿勢としての「待望」が待降節のテーマです。既に現れた、キリストを待ち望むことです。この待ち望むこととしてわたしたちが目を覚ましていなければならないのです。主人がどの時間帯に家に帰ってくるのか、僕たちが知らされないからです。この待ち望むことは待降節のテーマですから、第一主日は、「目を覚ましていなさい」という、いつでも主を迎えるように準備することを促す福音の言葉を聞きます。「目を覚ます」ということは、キリストが再び来ることへの準備だと考えられています。また、人として、いつでも神様のもとに行く準備として日々心掛けるよう呼び掛けている言葉でもあります。わたしたち、誰でも、人として、日々の出来事に追われていて、大切なものを失いがちです。どんなに、現実の出来事で追われていても、目を覚まして、生きている神様を日々の生活の中で見出すことを促す言葉が今日の福音です。わたしたちは、生きておられるキリストを迎えるために自分の生活を見直すのです。

イエス様にとって「目を覚ましていなさい」という言葉は何を意味していたのでしょうか。それはイエス様の人々との関わり方から解ります。イエス様は、弱い人の味方ではありますが、決して、裕福な人を見下したというわけではありません。イエス様は、裕福な人、地位の高い人にも神様に対して真剣に考えてほしいと願っていたの

です。

マルコ福音書を読み続けるとわかることがあります。それは、イエス様は、ある貧しいやもめが自分の生活費から精一杯のものを神様に差し出したように、一生懸命に生きている人々を見て、感動していたのです。余裕がない中でも努力して生きることが大切にした人を誉めていたのです。つまり、心を込めた生き方は神さまの前で大切だということを訴えていたのでしょう。

心を込めた生き方とは、何事も真剣に取り組むことです。すべてのことに神様の愛を感じて取り組めば、日々出会う人々、出来事、また、担う仕事などに対するわたしたちの心や取り組み方が変わることになります。この待降節は、わたしたちが何を大切にして生きるのかを問われています。特に、新型コロナウイルス感染者が増えつつある昨今、本当に不安の中にいる人々をどう安心させるか、難しい課題です。神様から与えられた命を守るために、わたしも努力しなければなりません。新型コロナウイルス感染の終息に向けて、国の指導者たちも様々な対策を講じている中、わたしたちも協力しなければなりません。自分の小さな努力は大きな成果を生み出すのです。

マルコ福音書で「目を覚ましていなさい」とは、今、わたしたちが直面しているこの苦しい現実の中でも、神様に信頼を置きながら、自分の信仰をぶれずに一生懸命に生きて行くことでしょう。あの貧しいやもめのように、何もできない中でも神様との繋がりを大切にして生きて行くことです。待降節には、祈りと節制を通して、わたしたちの心にイエス様が喜んで生まれるように準備をしましょう。「目を覚ます」ということは、わたしたちの心の中にもイエス様が生まれたいと待ち望んでいるということを知ることでもあります。そのために自分の心を整えましょう。